

橘

莢葉ニ似テ莖弱ク草本ノ如シ、又唐山ニテ一名赤小豆トモ呼ブ故、誤テ神麴ニ用ル者アルコト
本草必讀ニ云ヘリ、今新渡神麴ニ完粒ノ入タルアリ、

〔倭名類聚抄十七〕橘

兼名苑云橘居密

一名金衣

和名太
知波奈

〔箋注倭名類聚抄九〕說文橘、橘果出江南、本草圖經云、木高一二丈、葉與枳無辨、刺出於莖間、夏初

生白花、六月七月而成實、至冬而黃熟、乃可噉、本草綱目引事類合璧云、橘樹高丈許、枝多生刺、其葉

兩頭尖、綠色、光面、大寸餘、長二寸許、四月著小白花、甚香、結實、至冬黃熟如盃、包中有瓣、瓣中有核也、

○中 本草和名不載、和名按垂仁天皇時、遣三宅連始祖田道間守於常世國、求得香果橘子也、見古

事記日本書紀、太知波奈、當是田道間花之急呼、李時珍曰、橘、柚、柑三者相類而不同、橘實小、其瓣味

微酢、其皮薄而紅、味辛而苦、柑大于橘、其瓣味甘、其皮稍厚而黃、味辛而甘、柚大小皆如橙、其瓣味酢、

其皮最厚而黃、味甘而不甚辛、皇國諸家從是說、以遠江白和所產紅柑子爲橘、愚○狩谷謂古有橘

無柑、柑甘於橘、故名柑子、是橘不如柑之甘美可知也、然則今呼太知波奈者、即橘呼加宇自者、即柑

子、又蜜柑者、柑子之最甘如蜜者也、

〔倭訓栞前編十四〕たちばな 橘を訓せり、今禁庭南殿の橘、八幡にて橘のもろ木とよめるも、現在

せり、衆樹は遍照僧正の孫也、石清水の坂にて祠前の橘ほとんど枯んとするを見て、

千早ぶる神のみまへのたちばなも、もろ木も共においにける哉、其後橘も再び榮え、衆樹も屢

ば遷りて、參議までに至ると大鏡に見ゆ、春盤に用る物是也、田道間等が絶域より採來りたる事、

日本紀に見えたり、よて田道花といふにや、其裔橘守を氏とせり、此種初て本邦に來るをもて、名

を擅にせるにや、橘類にては最下品也、此種は綿橘といへるもの也といへり、

〔古事記傳二十五〕橘は和名抄に、橘和名太知波奈とあり、此名は將來つる人の名に因て多遲麻花

と云なるべし、但し此物は花よりも實を主とすれば、花を以て名けむことはいかゞとも云べけ

れど名のまを思ふに、なほ婆那は、花とこそ聞ゆれ、花橘とも云是も花を賞て云